

15・陳述度？

—芳賀綏氏の書評に答えて—

拙著「現代語法序説」に対す、芳賀綏氏のご高評によって、統覚、陳述、陳述度などの用語に対すの反省が必要になつてきた。取りあはずここに「陳述度」の弁解を試みる。

英語動詞の活用形は定（finite）の陳述形と不定（non-finite）の非陳述形とにセツ然兩分され、中間はない。さっぱりと齒切れがよい。次の大文字は陳述形、イタリックは非陳述形である。

if he COMES ……

if he WILL come ……

単文、重文、複文の區別は陳述形の個数や相互關係による。陳述形はセンテンスなりクローズなりのいわば責任者である。

日本語の「来レバ」は if + COMES に相当し、陳述形とも言えなければ、非陳述形とも言えない。割引き陳述形というくらいなところかも知れない。「モシ」「タトイ」などを陳述の副詞

と呼んでいるのは、この割引き陳述に係る副詞というつもりなのだろう。かりに「来レバ」や「来ルナラ」を陳述形と見なしても、それでは「来テハ」「来テモ」「来テ」「来」はどっちなのかと見てくると、陳述形を確定することは非常に困難である。責任者が確定しない以上、日本文法で重文だの複文だの言つてみたところでそれらを形式的に裏付けることができない。

その代りに、我が活用形は言切りの完（final）と係りの未完とに二分するはかないが、この二分には齒切れの悪さがつきまとう。未完の末の字は、いまだであり、やがてであつて、未完はやがて—遅かれ早かれ完結するという約束を持っている。彼の不定は程度を欠く不定一式だが、我が未完には完結までへの遠近のいくつかが程度がある。

甲、何々シテ……………文末

乙、何々スレバ……………文末

丙、何々シタカラ……………文末

点線の部分には長短さまざまな文句を入れることができるが、むやみに引伸ばすわけにはいかず、長さの自然な限度というものがある。丙の点線は最も短くて、ここにあまり長い文句を入れると不自然になるし、また点線部に使う活用形にも多少の制限がある。つまり「何々シタカラ」は文末近きを思わせる係りである。反対に甲は文末まで前途リョウ速でありえる。子供に叙事文を書かせると、朝起きテ、顔ヲ洗ツテ、ゴ飯ヲ食ベテ、テ、テ、テ、テ、とたいへん長いセンテンスを書くことがある。そして点線部に使

う活用形にも全く制限がない。乙は甲と丙との中間の程度である。彼ガ来レバ（直グ連絡スルカテ、君モ来テ）ホシイ

というふうには、乙の点線部に丙の係りを入れるのは簡単だが、この逆をやることは、不可能ではないが、すらすらとはいかない。

このようなはたらきを、各活用形（プラス付属辞）が発揮するこのような構文的機能を、文末遠き弱から文末近き強（文末自身は最強！）までの陳述度と見なし、それを大まかな三段階に分けて単式、軟式、硬式、それに別格の遊式の四式を立てたのであった。

……阪倉、渡辺、芳賀諸氏によって文末の「陳述」が次第に明確にされつつあることは喜ばしい。それとともに、日本語の構文論を打建てるためには、文末以外の「係り」の役割を調べて行くことも必要なのでそのためにはやはり何らかの諸式を立てなければなるまい。というわけで単軟のアン式、コオ式、ユウ式にはなおしばらく執着したいが、陳述度という用語は不適當であった。以上の弁解をもって、この用語を解消したい。

三上章論文集

定価 6,800円

1975年6月30日 初版発行

Kakite : MIKAMI Akira

三 上 章

Hanmoto : くろしお出版

101 Tôkyô, 千代田区神田小川町3-24

でんわ : (03) 291-3557

ふりかえ : 東 京 3 1 3 0 1

くみ : オール企画 すり : モリモト印刷 製本 : 大洋社

(ページがおちている本, いれちがっている本は とりかえます)

